

●語学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・下地早智子）が担当する。原則として2023年1月から12月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通りである。

音韻：	更科慎一（山口大学）
文字・訓詁：	宮島和也（成蹊大学）
文法・語彙（上中古）：	楊安娜（北海学園大学）
文法・語彙（近代）：	永井崇弘（福井大学）
文法・語彙（現代）：	前田真砂美（奈良女子大学）
方言：	鈴木史己（南山大学）
教育：	小川典子（愛知大学）

「はじめに」及び全体の調整は下地早智子（神戸市外国語大学）が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも2023年に出版されたものである。

『雲』	『雲漢』第1号（京大中国語学研究会）
『中』	『中国語学』270号（日本中国語学会）
『現代』	『現代中国語研究』第25期（朝日出版社）
『中教』	『中国語教育』第21号（中国語教育学会）
『漢教』	『漢語与漢語教学研究』第14号（桜美林大学孔子学院）

一、音韻

まず、藤田拓海『陸法言「切韻」研究』（本文カラーCD付／中国語学研究 開篇 単刊18、好文出版）の出版に言及したい。本書は著者が2018年3月に提出した博士学位論文を公刊したものである。百年を超える『切韻』諸本研究史を手際よく整理・概観した上で、切韻原本の復元の試みとして1973年に公刊された李永富『切韻輯料』に対し、李氏未利用の残巻からの情報やその後の研究成果を補充しつつ全面的な検証・修正を行い、もって現有の資料から推定可能な陸法言『切韻』の原本の姿を示したものである。この重要な文献に対する日中の膨大な既存研究を渉猟し、世界に散在し様々な形で公開されている残巻を分類整理し、『広韻』に至る所謂切韻系韻書の複雑な形成過程を一覧できるように示すことは、どの一つをとっても大変な労力を要する仕事であるが、今回その仕事がコンパクトな形で、誰でも見られるようになったことは、漢語音韻史研究に携わる者全てにとって、一大快事であると言える。もともと、日本における切韻系韻書の研究水準は極めて高い。本書の参考文献でも、中国語圏での研究を凌ぐ点数の日本の研究が挙げられ、十全に利用されている。近年、中国においても、切韻諸本の校勘や『切韻』原本の復元の試みがいくつかなされているが、本書20頁で著者も指摘するよう

に、切韻残巻に対する日本の研究は中国ではほとんど知られていないのが現状であり、本書の出現によって、日中両国のそれぞれの長所が生かされ、切韻研究がより進展していくことを期待したい。

日本漢字学会編『漢字文化字典』（丸善出版）には、第一章「漢字の形・音・義」「字音について」や、第五章「中国と日本の字書と辞書」「中国の字書と辞書」の中に、中国語の音韻に関わる項が多数収録されており、また第十章「アジア・世界から考える漢字」の中には、中国周辺の漢字音やさまざまな対音資料に関する項が立てられ、漢字音に対する多角的な視点を提供している。東アジアや内陸アジアの広い視野に立った漢字音研究の現況が日本社会に広く知られることになるう。

上古音の領域では、野原将揮「Old Chinese “egg”: More evidence for consonant clusters」(*Language and Linguistics* 24 (2))、野原将揮「略談“非”的上古音及相關問題」(『雲』)が発表されている。前者は「卵」字を取り上げ、その声母について、中古音から出発する限り単純な r- 声母が再構されるにとどまるが、諧声現象、閩祖語、南方諸民族語の関係詞、及び出土資料などの様々な事象が kr- 式の音節初頭子音群の再構を支持するとする。後者は唇音声母を持ち微部に属する「非」「飛」の上古の主母音について、六母音体系説及び Jaxontov の「円唇母音仮説」に立脚しつつ、現代閩語を含む様々なデータを用い、また「非」の合音説も検討しながら、関連する諸問題を提起している。

上古・中古間の音韻問題を扱ったものに、三輪大樹「六朝文人における虞韻唇音・云母字と魚韻の通押現象」(『雲』)がある。論文では、羅常培氏による 1931 年の有名な研究に対する綿密な批判と南方文人の例外的な通押例の検討を通じ、虞韻と魚韻の通押の条件が「唇音声母及び云母」であることを見出し、それに対して音韻論と音声学の立場から解釈を行っている。この議論は三等韻と非三等韻の間の有標・無標の解釈などの音韻論的問題の他、魏晉南北朝時期を通じての北音と呉音の勢力関係の変遷などの非言語的問題とも関連し合っている点で興味深い。

太田斎「東三、尤韻明母讀音之我見」(神戸外大論叢 76)は、音韻史上、中古音の東韻三等及び尤韻において明母字が例外的に軽唇音化しなかった理由について、漢語音節の音素配列論 (phonotactics) 的特質に着目した新たな解釈を行っている。各時代の音韻資料の他、現代の普通話及び北方・南方の諸方言の単字音や“変韻”など様々な資料に言及しながら、一見すると小さな現象の背後にあるいくつかの音韻史的問題を縦横に論じた、スケールの大きな論考である。

中古・近世間の漢語音と関係のある重要な研究として、武内康則『契丹小字で表記された漢語音と契丹語の音韻』(神戸市外国語大学研究叢書 66)を挙げる。本書は契丹語の音韻体系の解明を主眼としているが、資料の中に大量に含まれている漢語音の表記を対象としていることから、当時の漢語音の解明にも多くの手がかりを与える。資料編として、資料中の漢語音表記例を文脈付きで収録し、契丹小字で表記された漢語音の音序索引を附している。

近世音の領域では、対音資料に関する論考が見られる。鋤田智彦「『御製増訂清文鑑』

の漢字音」(*Artes Liberales* 112) は、同氏の 2019 年の論考に続き、『増訂清文鑑』に見られる満洲文字表記漢字音の声母と韻母を帰納し、資料中に出現する漢字音の表を付している。更科慎一「『西番館来文』に見られるチベット文字表記漢語について」(『山口大学文学会志』73) は、明代の蔵漢対音を扱っている。(更科慎一)

二、文字・訓詁

書籍についてはまず、日本漢字学会編『漢字文化事典』(丸善出版)を挙げる。本書は「漢字の形・音・義」「漢字の誕生と発展」「漢字が書かれる素材」「日本の漢字文化」「中国と日本の字書と辞書」「印刷と出版」「漢字の学習と教育」「漢字と書芸術」「漢字とコンピュータ」「アジア・世界から考える漢字」の十章に大きく分けられ、各項目は 2~4 頁ほどにまとめられている。漢字に関する諸問題が幅広く網羅的に扱われ、しかも一般の読者にも読みやすく理解しやすい構成・記述となっている。なお、本書の刊行の経緯や内容の特色については「『漢字文化事典』刊行記念座談会 漢字研究の新たな地平を拓く」(『学会通信 漢字之窗』10) に詳しい。

次に、本年は文字に関する中文書の邦訳が相次いで刊行された。黄徳寛・陳秉新著『漢語文字学史』(遠藤隆俊監訳、陳祥・王勇萍・高橋俊訳、汲古書院)は、2014 年に安徽教育出版社から刊行された『漢語文字学史(増訂本)』の邦訳であり、先秦時代から現代までの中国における文字学、すなわち漢字研究の研究史を総括したものである。そして黄徳寛他著『古漢字発展論』(藪敏裕監訳、石川泰成・鋤田智彦・名和敏光・宮本徹・劉海宇訳、樹立社)は、2014 年に中華書局から刊行された『古漢字発展論』の邦訳で、甲骨文から隸書に至るまでの漢字の構造・形体や文字使用の変遷を分析したものである。上述した『漢字文化事典』もこれらの邦訳書も、日本における漢字研究の裾野を広げる役割を担うものであると言えるだろう。

論文では、まず野原将揮「浅谈秦简中的“𠂔”字」(『出土文献』2)を挙げる。本論文は秦簡において{𠂔}を表す「𠂔」について、①右上部の「口」が「疋」の省略形であり声符であるという説、②右部の「耳」が声符であるという説を検討する。そして「疋」は上古の魚部である一方、「𠂔」は『説文』の記述(「𠂔」と「細」を同音とする)や中古音・漢語諸方言から緝部であると考えことから、②の「耳」が声符であるという説が妥当であるとした上で、「𠂔」は「𠂔」の右部の「耳」が後に「胥」へと訛変した字体であるという。近年、古文字研究と上古音研究とは相互に影響を与えながら発展を遂げているが、本研究もその流れを汲みつつ両者を効果的に組み合わせたものと言えよう。

次に、曹方向(草野友子訳)「安大簡『詩経』と『説文解字』引詩の文字比較研究」(『中国研究集刊』69)は、出土資料である安大簡『詩経』と、『説文』に「詩曰」等として引用されている『詩経』の文字の字形とを比較し、『説文』が引用する『詩経』では実際の詩の意味に合わせて文字に義符を追加・変更しているという特徴が見られ、それが『説文』の正字意識を表しているという。伝世文献と対照可能な出土資料が増加する中で、これまでとは異なる角度や視点から伝世文献に対する検討を行うことが可能と

なっており、今後も多くの研究成果が発表されていくことだろう。

そして、片倉峻平・大向一輝・永崎研宣・大西克也「複数の解読情報を並存させた中国出土資料のテキストデータ化とその展望」(『中国出土資料研究』27)では、出土文字資料の積読情報をテキストデータとして効果的に記述する手法と、そのデータを応用したデジタルアーカイブについて、包山楚簡を対象とした著者による実践例が紹介されている。情報処理の知見を出土資料に応用することは古文字研究の進展に大いに資するものであり、今後の展開が注目される分野である。

この他、本年も引き続き出土資料の訳注が数多く刊行されている。金文については例年通り、『漢字学研究』11に「金文通解」として西周～春秋時代の金文の訳注が5篇掲載されている。楚簡の訳注としては小寺敦「清華簡『邦家處位』譯注」(『東洋文化研究所紀要』182)がある。また秦簡については宮宅潔編『嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》譯注』(汲古書院)がある。本書は陳松長主編『嶽麓書院藏秦簡』(上海辞書出版社、2015)に収録された法律文書について詳細な訳注を付し、加えて関連する論考15編を収録したものである。出土資料を用いた、文字をはじめとする古代中国語研究の基礎を支える研究として訳注は重要であり、今後も着実な成果が発表されることが期待される。

最後に、横大路綾子「二〇二一年古文字学論著目」(『漢字学研究』11)は例年通り日本語・中国語で刊行された古文字学に関する単著をリストアップしており、有用である。(宮島和也)

三、文法・語彙(上中古)

個別の論文としてまず取りあげたいのは、大西克也「上古汉语被动句及其中的世界观—以动力表达为线索」(『継承伝統 博古通今：慶祝郭錫良先生九十華誕學術文集』、商務印書館)である。本論文は上古漢語の受動文の発達の度合いが低いという認識に基づいた上で、上古漢語における受動文の使用が、どのような目的に由来するのか、それが如何なる世界観を反映するのか、この時期の受動文の核心的な特徴は何か、といった点について考察したものである。まず上古漢語における「受動」に関わる六種類の構文(「為」字句、「見」字句、「被」字句、「於」字句、無標の受動文、形態受動文(清濁別義などの音形変化による受動文))の構造と意味特徴を整理し、「受動文」として典型的であるか否かを指摘している。ついで、典型的な受動文とされる「為」字句と「見」字句についての具体的な分析、受動文と使役文との非対称的な発展の比較を通じて、上古漢語の受動文は文法化の程度が低く、種類が少ないことを指摘し、その理由として上古漢語は対格言語であり、強い「動作主指向性(agent orientation)」を備えており、動作主を主語として選択する傾向が強いことと関連する可能性を挙げている。本論文は、上古漢語の受動文の特徴をマクロな視点から考察し直し、さらに言語類型論の観点から、そのような特徴を備える要因について興味深い論点を提示している。受動文の通時的研究に資するだけでなく、上古漢語の他の文法現象を研究する際にも大いに参考になるであろう。

次に松江崇「試談敦煌變文中的兩類名量詞及其語義功能的差異」(『雲』)を取り上げ

る。当該論文は、敦煌変文を資料としつつ、唐五代の八種の量詞に対して包括的な調査を行い、「条」「片」「種」「個」「尺」の五種類の量詞は名詞に対して数量詞前置語順（「(数+)量+名」）を多くとる「前置優勢類」であり、「枚」「頭」「斤」の三種類は数量詞後置語順（「名+数+量」）が優勢な「後置優勢類」とであると指摘する。そしてこの語順の分布の違いは、意味機能の違いに起因するものであるとし、前置優勢類は名詞に特定の「イメージ」や「属性」を与えるもので当該の名詞の「個別性」を高める機能を持つが、後置優勢類は一般に「個別性」を付与する機能が低いと主張している。その根拠として前置優勢類の量詞には重ね型を形成し得たり、数詞の省略が頻繁に見られるという文法的特徴を提示している点も注目し得る。さらにいくつかの「例外」現象が生じた要因として、修辞レベルの要因（類推）や談話レベルの要因（主題化）を挙げており、これらの要因が語順という統語構造に影響を与えた可能性を示唆している。古漢語の「数量名」フレーズの構造と意味の関連性について言及した先行研究は従前にも存在するが、量詞の意味機能とフレーズの構文的意味との対応関係に関する検討はまだ不十分であった。本論文は、この点について具体的に論証しており、関連研究に対して有益な示唆を提供するものである。

上述の二論文の共通点は、意味だけでなく、認知的・語用論的要因が文法化の過程に与える影響にも注目している点である。これが歴史文法の研究において重要な視点であることは間違いなさであろう。

辛嶋雲青「試論“使”“令”表假設用法的演變機制及特徵」（『雲』）は、上古漢語における「使/令」を用いた假定用法の生成のメカニズムと、構文の意味的特徴とを考察したものである。当該論文は先行研究に基づきつつ上古漢語の「使/令」文の意味機能を整理した上で、「使/令」文が「使役」義から「假定」義へと拡張する条件として、①使役義が希薄化すること、②「使/令」が前節の文頭に位置した上で、後節と「假定-結果」の意味関係をなしている場合に、節間の意味関係を表示する他の形式が存在しないこと、という二点を挙げている。辛嶋氏の考察は、一部の先行研究にみえる見解を裏付けるものであるが、同時にこの文法化の過程において、「使/令」文の「假定」義を表す用法と「祈願」義を表す用法との類似性にも言及している。辛嶋氏は「祈願」義から「假定」義へと拡張したと明言しているわけではないが、「祈願」義から「假定」義への拡張であると推定した場合は「意味の変化は、通常、客観的な意味から主観的で話者を中心とする語用論的意味へと拡張する」という一般的な見解と矛盾してしまうことが問題となろう。いずれにしても、先行研究で言及されていない「假定」義と「祈願」義との類似性に注目したことは、上古漢語における「使/令」文の意味変化の理解を深める上で新たな視点を提供するものと言える。

最後に、資料面での成果について瞥見したい。新たに公開された出土文献として、**北京大学出土文献与古代文明所中心編『北京大学藏秦简牍』**（上海古籍出版社）がある。約二十種類の性質の異なる文献を収めており、秦代の文字、語彙、文法の研究の一助となることが期待される。また伝世文献の訳注としては、土田健次郎『論語』（筑摩書房）、渡邊義浩ほか『全譯魏武帝註孫子』（汲古書院）、田中和夫『毛詩注疏訳注・小雅（四）』

(白帝社) などが刊行された。

(楊安娜)

四、文法・語彙 (近代)

ここでは清代から民国期の資料による研究成果を概括する。近代の中国語研究資料は大きく本土資料と周縁資料に分けられ、周縁資料は日本資料、満漢資料、西洋資料、朝鮮資料などに分類される。2023年の研究動向として、周縁資料の日本資料と満漢資料、西洋資料を用いた研究が目立つ。

日本資料による奥村佳代子「『生意襍話』における北京官話の特徴」(奥村佳代子編著『周縁資料と言語接触研究』、関西大学東西学術研究所)は、御幡雅文による商業会話書の語彙の特徴を“僑們”の使用、介詞“給”の用法、助詞“來着”、語気助詞“呢”の使用、禁止を示す“別”の使用、程度副詞“很”の使用、形容詞+“多了”から考察し、それが北京語ではなく北京官話であること、また北京官話が当時の商業界で広く用いられていたことを指摘する。また、楊昕「《官話指南》(1882) 中的“被”字句句型—与同时代中国资料的比较」(『中国語研究』第65号)は、『官話指南』の“被”字句の句型について、同時期の中国の報刊雑誌との比較では数量が顕著に少ないが、その用法は不如意・被害を表す働きが最多であるなど、江戸晩期の中国語教材と比較しても概ね相違がないと述べる。さらに、日本生まれの『官話指南』の関連研究として、萩原亮「ロシア語対訳版『官話指南』の版本系統と言語的特徴」(『中国語研究』第65号)では、ロシア語対訳版の系統を主に音韻的特徴から考察するが、語彙的特徴として“了”の用法と一人称代詞複数“僑們”の使用も指標として用い、ロシア語対訳版の独自性と近代中国語研究におけるロシア資料の重要性を指摘する。

満漢資料として、李云「清代満漢合璧教材中の“給”字句考察」(『東アジア文化交渉研究』第16号)では、近代北京語としての“給”は、満漢合璧資料における用法の変化が本土資料に比して大きく、その原因が地域的な差異と本土資料の小説言語の保守性にあると論じるとともに、満洲語の近代北京語形成への影響を指摘している。同じく満漢合璧資料を用いた竹越孝「『清文指要』『續編兼漢清文指要』の成書過程—版面の差異と語彙の偏在から—」(『神戸外大論叢』第76巻)は、両会話書の成書過程の解明において語彙の異同からも考察を行い、『清文指要』が官話的・南京的、『續編兼漢清文指要』が口語的・北京的な特徴を有すると指摘する。

西洋資料のプロテスタント系資料による永井崇弘「ラサール訳《嘉音遵囑咄菩薩之語》における並列関係を示す連詞の用法について」(『關西大學文學會紀要』第44号)は、19世紀初に印度で翻訳された漢訳聖書の並列を示す連詞を考察し、“兼”を主として“及”や“與”も使用され、“並”と“又”は“兼”、“及”、“與”の使用で不足が生じた際に補助的に用いられると述べる。同じくプロテスタント系資料による朱鳳「『致富新書』の翻訳考—原書との比較を中心に—」(『日中語彙研究』第12号)は、おおよそ新概念を示す漢訳語彙には既存語が用いられ、新造語がほとんどないと指摘する。

本土資料による大島吉郎「《官場維新記》における言語的特徴について」(『語学教育研究叢書』第40号)では、清末の譴責小説『官場維新記』の言語的特徴を太田辰夫の

北京語七大特点と接尾辞“～子”、“～儿”、方言色彩を帯びた語と表現の観点から分析を行い、そのなかの清末江淮官話の特徴を解明する。特に「受益者を導く介詞」として“替”が中心であること、接辞の“～子”の多用、“V 得来+四字格”など江淮官話や方言色彩を帯びた語や表現を確認する一方、“別”や“不要”といった北方方言とされる語の混入を指摘する。また、千野万里子「叶圣陶の言語について (6) (書き換え作業と普通話, “～子” “～儿”に見られる修正を中心に)」(『杏林大学外国語学部紀要』第35号)は、下江官話の要素を持つ『稻草人』における“～子”と“～儿”が、新中国成立後に修訂が行われ、語義や語形の標準化が進められる一方、同義語間の微妙な違いや語気の表現のために非標準的な“～子”や“～儿”を残存させたと指摘する。

最後に言及したいのは、山田忠司編『老舎言語辞典』(好文出版)である。近代と現代の架け橋となる老舎の言語は、近代の文法・語彙研究にとっても有用である。2016年の『老舎北京語辞典』を増補・改訂した本書は北京語を含む一般辞書に未収録の語句を収め、老舎言語のエッセンスとも言える。所収の語句は近代北京語・北京官話の語彙・語法を解明する指標としても大いに参考となる。

これら文法・語彙の研究成果のほか、周縁資料の発掘、著者や翻訳者を含む書誌や成書過程の解明という関連研究の活発化が見られる。特に官話資料の発掘と書誌的研究には著しい成果があり、それらに基づく文法・語彙の研究成果が期待される。(永井崇弘)

五、文法・語彙 (現代)

補語に関する論考が多くみられた。丸尾誠「中国語の動補フレーズ“V 満”の使用に反映された飽和義—存在表現を中心に—」(『日中言語対照研究』25)は、存在表現における“V 了”に認められる「動作の完了から結果の残存への推移」という動機づけが、“V 满了”においては「飽和状態への到達」という一種の推移として実現すると分析。「飽和」の背景には容器の容量という限界性がある。“?教室里坐满了三十个学生”のように成立可否の判断がゆれる例についても、話者がそこに「収容定員」という限界を読み込むか否かによる問題であり、「限度に達する」という“満”の語彙の意味に即した解釈であるとする。劉士沢「結果義と乖離義を表す“VA 了”の相違に関する一考察—否定形式の非対称性から—」(『漢教』)は、“VA 了”の否定形式における非対称性に着目したもの。“没(有)VA”は結果義と乖離義のいずれの否定でもあり得るのに対し、“(V 得)不A”は乖離義の否定でしかあり得ない。その理由を、乖離義を表す“VA 了”が顕在的な「受け入れの許容範囲からの乖離」という意味をもちつつも、潜在的な「状態変化」をも含んでいるためと説明する。方向補語については、王棋「“上”与“起来”的情状、情态表达及其语义基础」(『中国語文法研究』2023年卷)が事態観察の方式という点から考察し、“上”と“起来”の互換性や対立性は文脈から離れては論じられないと述べる。“起来”は身体的な直接体験を基盤とすることから、知覚体験による事態の客観的進展の認識・描写に重点が置かれ、“上”は「移動後その位置に留まること」が意味拡張の動機づけとなって、「動作の実現に伴う新状態の形成」の主観的把握に重きが置かれる。“上”が目するものは過程ではなく結果状態であり、これに

マイナス評価がつきまとうという従来の指摘についても、「結果」は願望の実現や達成と密接に関わるためと分析する。楊明「浅谈 [V-得-C] 因果型补语的“功能二象性”——从篇章的维度看“程度”和“结果”」（『現代』）は、“他高兴得跳起来”のような [V-得-C] の因果型補語 C の機能に「結果」と「程度」の二重性がみられることについて、談話レベルで考察。談話構造に大きく影響する「談話的な卓越性を有する補語」は他の表現に代替できないが、「談話的な背景になる補語」は談話内の前景部分に対して詳細な説明（elaboration）を行うものであり、程度補語や程度副詞で代替しても談話の構造に大きな影響を与えない。因果型補語の機能はそれぞれ、具体的なコンテキストにおいて確認される談話的卓越性の程度に応じて、「結果—程度」の連続体の上に位置付けられるものと主張する。

上記はいずれも「結果」に関わる議論を展開しているが、楊論文をはじめとして、具体的な談話内における機能を分析することで諸現象を捉えようとする点が、ここ数年の研究動向として注目される。文や節よりも大きなまとまりを意識した論考は、蔡洁芳・赵春利「如愿副词“终于”的话语关联与语义情态研究」（『現代』）などの副詞研究にもみられた。

受身表現に関する論考も多く発表された。陳玥「受動者主語文“V得”構文の意味機能について」（『現代』）では、“这个屋子打扫得十分彻底”のような“V得”構文は、動作主による動作対象への働きかけが背景化し、動作対象のみが焦点化されているという点では中間構文と類似するが、話し手の現実的・臨場的体験に依存し、特定の出来事によって獲得された性状を表す点で、中間構文がもつ「総称的状况を述べる」という特徴に合致しないと結論付ける。馮一峰「中国語受動文の事象構造分析」（『漢教』）では、“一”を用いる受動文と“得”を用いる受動文はどちらも先行事象と後発事象の間に因果関係を含む複合事象を構成するという前提のもと、“被他这么一哭，我睡不着了”では先行事象の動作主“他”の出現が義務的であるのに対し、“我被他哭得睡不着”では省略可能であることについて、“V-得”を「結果」を表す命題を項として取る複雑述語とみなし、両者の統辞構造の違いから分析。複合事象を構成する下位事象としての命題（眠れない）が“V-得”の内項となり、下位事象が同定されることで先行事象の参加要素も同定されるため、統辞上で実現される必要がないとの見解を提出している。“被”構文については陳冬姝『話し言葉における受身表現の日中対照研究』（ひつじ書房）が、談話における機能に着目した議論を展開。同書は用例調査により“被”構文には第三者がほかの第三者に働きかけるパターンが最も多く現れることを突き止め、中国語では変化・被害・迷惑といった“被”構文の意味的機能が重視され、視点の固定といった談話的機能が相対的に弱いことを検証している。

ダイクシスに関わるものとして、雷桂林「时空定位与“来”“去”的语义机制」（『漢教』）、孟鷹「汉语指示词的情意用法：以照应用法为中心」（『中』）を取り上げる。雷論文は、中国語が空間において強い制限を受けることを、テンスをもたないことに関連付けて論じる。日本語がテンスと話者視点の制限を多く受け、発話時を基準としてデキゴトを時間軸上に位置付けるのに対し、中国語は眼前か非眼前かという区別をもって空間

上に位置付けるとする。孟論文は日中の指示詞の情意用法について以下の違いがあることを指摘。①中国語の近称照応指示詞の情意用法は、聞き手に比して指示対象に対する情報優勢をもたないことを話し手自身が認識している状況下でのみ許容される。②中国語の情意指示詞は感嘆文において、マイナス評価の名詞や名詞性フレーズだけでなく中性的語彙や固有名詞にも使用される。

否定に関する著作も複数刊行された。曹泰和『現代中国語の反語文・疑問文に関する研究』（白帝社）は、否定疑問文や反語文“不是……吗？”など、否定を含む表現を多く扱い、李貞愛『現代中国語潜在的否定表現の研究』（朝日出版社）は、否定詞を用いない非明示的否定のうち、語彙の意味に否定が内包されていないものを扱う。なかでも、否定的意味を表す“(V) 什么N”について、曹氏はコーパスでは“什么N”より“V 什么N”のほうが圧倒的に多いことを挙げ、後者が一般的であるとしたうえで、“什么N”においてNがプラスの意味をもち、“什么”はそれを否定するマーカーとして機能していると述べる。李氏は動詞を伴わない“什么NP”の例を観察し、NPが持つべき性質Xが話し手のなかにあり、実際の状況Yがそれに反するとき、話し手が「Xが正しい、合理的」と判断するか否かによって、Yに対する否定的評価と肯定的評価のいずれかが表明されるとする。

また、战庆胜『汉语敬语研究』（白帝社）が敬語表現について、尊厳欲求、審美的欲求を満たすという点を議論の中心に据えて論じており、何が敬意の表出に結び付くかという点で興味深い。

最後に、語彙研究の面では、杉村博文「聲もこえのみにはあらずして音もおとのみにはあらず」（『現代』）が、“声”と“音”の意味的対立を通時的に探っている。鍵となるのは「意味をなす言語音であるか否か」。現代語では“声”が物理的な音響面に偏り、“音”が言語音に偏ることも指摘している。（前田真砂美）

六、方言

方言文法に関する論考が多く見られた。宋天鴻「绍兴方言的句末助词“哉”」（関西外国語大学『研究論集』117）は、紹興方言の文末助詞“哉”の振る舞いを動詞のタイプ別に分析し、“哉”が新たな状況がすでに実現していることを表し、已然に属すること、「相対的過去」という時間的意味を含むことから完結相のマーカーと見なすことができることを指摘している。藤原優美「成都方言における“给”の文法的機能について」（『広島国際研究』29）は、成都方言の“给”について、普通話と対照させながら動詞・介詞・連詞の品詞別に各用法をまとめている。川澄哲也「元代白話および青海方言の句末に現れる「有」について—賈晞儒氏の「同源説」を検討する—」（『九州中國學會報』61）は、賈晞儒『心鏡：蒙古語青海方言』が引用する青海省の漢語方言にみられる句末の「有」の特殊な用法と、元代白話にその起源があるという説に対して、元代白話の句末の「有」の概観と民族移動史に基づく検討により、両者の間に歴史的なつながりは無いという結論を提出している。野田寛達「漢語方言の「原因」を問う疑問詞表現の類型分析と方言調査項目の提案」（『中國文學研究』49）は、言語類型論の観点から、普通話

と 53 の漢語方言に見られる原因を問う疑問詞を内部構造に着目して 7 タイプに分類し、今後の調査ではこの 7 タイプを調査項目に設定し、存在するものだけでなくどれが存在しないかも記述するとともに、他のタイプが存在する可能性も考慮すべきと提言する。

音声・音韻関連の研究として、平田眞一郎「無錫方言の応用式変調における方向性のパラドックス—優位音節移動仮説に対する反論—」（『中國文學研究』49）は、北部呉方言の応用式変調は一般に左方優位型に分類されるが、第一音節の基底声調自身も変化することがあるという、方向性に関する矛盾した状況を、無錫方言の二音節語の連続変調に焦点を当てて論じている。無錫方言の応用式変調では優位音節が歴史的に第二音節から第一音節へ移動したという仮定に基づく Chan and Ren (1989) (Wuxi tone sandhi: From last to first syllable dominance, *Acta Linguistica Hafniensia* 21 (2): 35-64.) による説明への反論を提出し、無錫方言の連続変調にみられる連鎖的推移は通時的な観点から説明されるべきと主張する。

音韻史について、秋谷裕幸「**闽东区蒼南方言中发生的三种韵母链移音变**」（『中』）は、閩東区北片祖語を蒼南方言の直接の祖語と見なしたうえで、蒼南方言において 3 種の連鎖変化（引き連鎖）が見られることを指摘する。*i、*ie、*ia/ia? の 4 韻で起こった 1 つ目の連鎖変化と、*a、*ua、*aʔ、*ai、*ε、*œ、*ui の 7 韻で起こった 2 つ目の連鎖変化は、隣接する呉語瓊江片の影響によるものであるとともに、相互に平行変化を促進するものでもあったのに対し、*ɔ/ɔʔ、*au の 3 韻で起こった 3 つ目の連鎖変化は完全に内部変化によると考察している。

言語地理学的研究では、岩田礼「中国における河川と方言」（『静言論叢』6）は河川が漢語の方言分布の歴史的形成と方言伝播に果たした作用を考察し、淮河と長江が方言伝播を押しとどめる橋頭堡となり南北を分かち方言境界線が形成された一方、長江は方言伝播を促進する要道ともなり、「長江型」や「楚型」といった分布パターンが見られること、また、微視的観点では小規模河川でも対立する方言の勢力がそこで拮抗する場合は境界線となりうることを指摘する。SUZUKI, Hiroyuki et al. “Geolinguistic approach to Sino-Tibetan: Lexical relationship in some animal and plant terms”（『地理言語学研究』3）は、「犬」、「豚」、「稻」、「小麦」を例に、漢語派とチベット=ビルマ語派の言語地図を結合した地理言語学的アプローチを試行し、「犬」と「稻」は両者の間で語根レベルの関係が見出されるのに対し、「豚」と「小麦」では借用関係が見られることを指摘する。

社会言語学的研究として、吉田真悟『台湾語と文字の社会言語学：記述的ダイグラフィア研究の試み』（三元社）は、漢字・ローマ字を中心に複数の文字体系が使用されてきた台湾語について使用領域ごとに文字使用状況を分析し、学校教育（教科書）、言語運動（雑誌）、大衆文化（歌謡曲の歌詞）、社会・経済活動（言語景観）の 4 つの使用領域のうち、前 2 者が教育部の方式に基づき規範化が進んでいるのに対し、後 2 者はその度合いが低い一方で、前 2 者にならった規範的な表記が現れ始めていることを指摘する。さらに、面接調査に基づいて、その文字使用の多様性・規範化と、ナショナルアイデンティティや言語復興といった言語イデオロギーの関わりを論じている。（鈴木史己）

七、教育

『中国 21』58 では「中国語教育の危機、そして展開」と銘打ち、コロナ期の中国語教育の取り組みと、アフターコロナの中国語教育のあり方を探求する特集が組まれた。紙幅の関係上、主な論説のタイトルのみ以下に挙げる。村上公一「モバイル端末・インターネット・機械翻訳—異言語間コミュニケーション手段の変容と外国語教育」、氷野善寛「中国語教育における ICT の活用—Google Jamboard/Ondoku Chinese/CTA」、清原文代「中国語オンライン授業のためのリソース」、田邊鉄「中国語 CALL 授業のこれまでとこれから—AI と“あるほかない” 私たちの中国語教育」、杉江聡子「ウィズコロナ・アフターコロナの中国語教育—外国語×ICT×専門教育でマルチモーダルなコミュニケーションスキルを伸ばす」、渡邊ゆきこ「VR にできること、VR にしかできないこと—VR を活用した中国語授業の実践報告」、丸尾誠「中国語教育について考える—変わるもの・変わらないもの」、山崎直樹「監視の要らない中国語教育を目指して」、紅粉芳恵・山本晃輔「With/Post コロナで求められる中国語教育とは」。

上記の特集と関連する研究として、杉江聡子「観光・メディア・外国語教育を統合した PBL の教授設計」（『複言語・多言語教育研究』11）では、VR を用いた多言語バーチャルキャンパスガイドを開発し、その学習成果と教授設計について評価した。島村典子「COIL 型外国語教育の試み—一日台の学生による課題探求型協働学習の実践—」（『中教』）は、オンラインでの課題探求型協働学習の取り組みと活動記録を報告し、教育効果を検証した。

『中教』では、中国語教育学会第 20 回大会（2022 年 6 月 4 日、5 日）における基調講演 2 篇が掲載されている。輿水優「中国語教育の「これまで」と「これから」—汉语教学 继往开来—」（『中教』）では、日本人と中国語のつきあいについて、過去から現在に至るまでの変遷をふり返る。その上で、日本人の中国語学習には、漢字漢語の知識が妨げとならずプラスに働くような工夫が必要であると述べ、日本人の学習者を意識した語彙表の作成や文法項目の選別、教材等が望まれるとしている。玉岡賀津雄「大学を退職した心理言語学者が中国語を勉強して思ったこと」（『中教』）は、自身の中国語学習を通して気づいた所感を述べ、中国語は他言語と比較しても無駄をそぎ落とした「省エネ化」された言語であると論じる。また中国のネット社会が日常生活に必要な語彙や表現を大きく変えたことを指摘し、生活上のニーズが話し言葉から書き言葉へと移行していると述べる。

学習者が産出する中間言語を分析した研究には、次のようなものが見られた。王峰「日本語母語話者における中国語仮定条件文の習得状況に関する考察—“如果”“要是”“的话”を用いた作文データに基づく誤用分析を中心に—」（『中教』）は、学習者が書いた作文データを基に仮定条件文の誤用をタイプ別に分類し、より効果的な指導方法を提案した。張軼欧「中級汉语学习者“把”字句偏误考察—以日语母语者为中心」（『中教』）は、中検 2 級受験者の解答から、「把+N1+V+P（前置詞）+N2+L（方位詞）」の文型の誤用パターンを分類した。さらに中国語教材の例文を分析し、どのような場合に

“把”構文を必ず使用しなければならないのかを学習者に明示すべきだと論じる。張可蓉・王片桐望「基于“可理解性”评价的语音偏误严重度考察—以日本人汉语学习者為调查对象」(『中教』)は、学習者の発音エラーが、会話全体の「理解しやすさ (comprehensibility)」にどの程度影響するのか分析した。その結果、重度の発音エラーと会話全体の理解しやすさへの評価は強い相関があったが、中低度の発音エラーには相関性が見られなかった。このことから、発音指導の際にも優先順位をつけて指導を行うことを提案する。

安本真弓・吉田泰謙『中国語可能表現の「理解可能なインプット」—新たな教授法モデルに関する論集』(東方書店)は7篇の論考を収めており、中国語の可能表現のメカニズムについて論じた上で、学習者へのテスト調査と、教員に実施したアンケート調査の結果から、可能助動詞“能”“会”“可以”と可能補語の指導モデルを教案例とともに示した。

かつては言語教育学では、横断的な量的研究手法が主流であった。しかし、近年は質的研究が増加しつつあり、その中でもナラティブ(語り)を手がかりに当事者や事象を理解しようとする、ナラティブ・アプローチが関心を集めている。秋山美香「第2外国語として中国語を学ぶ日本人学習者の自己変容—中国語を話す「わたし」の事例研究—」(『中教』)は、Dörnyei (2005)の動機付けモデル L2 Motivation Self Systemを理論基盤として、ある学習者の語りから収集したデータをKJ法により分析し、中国語学習者のL2自己とその変容を探った。小川典子「日本大学汉语继承語学習者の身份认同与汉语学习—基于四名华裔学生的纵向调查」(『国际中文教育(中英文)』8(4))でも、継承中国語学習者の語りから、アイデンティティがどのように学習に影響をするのか縦断的研究を行っている。(小川典子)